

東日本大震災後の陸前高田市における つながり続ける力

佐々木 亮平

岩手医科大学教養教育センター人間科学科体育学分野

我が国では 2011 年の東日本大震災（以下、震災）に限らず、これまでに多くの災害が毎年のように起きている。人や地域、時間、時代で災害への対応は変わり、正しい答えはないが、一方で時代や地域性などが異なっても、それらを越えて「人と人とがつながり続ける」ということは、有事においても、平時においても最も重要なことのひとつである。発災直後から何年経っても経験し続ける痛みや生きづらさはどの災害にも共通してある中で、2020 年から全世界に拡大した新型コロナウイルスによりソーシャル・ディスタンス、フィジカル・ディスタンスが叫ばれ、人と人とがつながり続けることが難しい状況となり、改めてその重要性と必要性を認識しつつも、理想と現実の中で葛藤している。

陸前高田市（以下、市）では震災後、全国からの応援チームや他分野の関係者を含む保健・医療・福祉関係者ととともに、地域の NPO 等の関係者、地域住民が一堂に会する陸前高田市保健医療福祉未来図会議（2018 年度から未来図会議に名称変更）を開催してきた（2022 年 5 月現在 94 回開催）。被災直後から市の保健医療福祉の現状と課題を共有し、復旧・復興に向けた直近の対策から、5 年後、10 年後の未来像も議論する「理解と共感の場」として機能してきた。しかし、震災直後は、場があり、モノがあり、人がいる、そしてその人の経験や関係性があることを前提とした、それまでの常識では対応できない災害対応が求められ、とりわけ「情報を共有する」こと自体が困難な状況になっていた。ゆえに、それぞれの立場や所属、資格等はあれども、できる人ができることを、「いいか」「わるいか」ではなく、し続けるより他はなかった。

震災から 11 年が経過したが、この間も見える被災、見えない被災、見えない孤立が市の中にあることを共有し続け、震災翌年から「はまってけらいん、かだつてけらいん運動＝集まって、語りましょう運動」を提唱し、人と人とがつながることの大切さを確認、発信し続けている。コロナ禍においてつながり続けることが難しい今だからこそ、お互いに声をかけあい、対話し続けることができる環境を改めて大切にしていきたい。

講演者プロフィール

岩手医科大学 教養教育センター人間科学科体育学分野 助教

現在取り組んでいる研究

東日本大震災後の被災地域における社会活動参加に関連する要因：the RIAS Study

資格

夫、父（子4人）、看護師、保健師、健康運動指導士、精神保健福祉士、養護教諭1種、第1種衛生管理者、(社)全日本ノルディック・ウォーク連盟 ノルディック・ウォーク公認指導員

学歴（最終）

岩手県立大学大学院 看護研究科 博士前期課程修了（看護学修士）

職歴

- 1998年 岩手県内初男性保健師として岩手県久慈保健所に採用、
岩手県大船渡保健所を経て、陸前高田市へ出向
- 2010年 日本赤十字秋田看護大学 看護学部看護学科
- 2012年 陸前高田市地域包括ケアアドバイザー
- 2014年 岩手医科大学 いわて東北メディカル・メガバンク機構
- 2016年 岩手医科大学 医学部衛生学公衆衛生学講座
- 2018年 陸前高田市はまかだ運動推進アドバイザー
- 2020年 岩手医科大学 教養教育センター人間科学科体育学分野

委員等

- 特定非営利活動法人日本健康運動指導士会岩手県支部支部長
- 岩手県健康いわて21プラン推進協議会委員
- 岩手県自殺対策推進協議会委員